

活動報告

二〇一八年「木下の森」青少年研修プログラム報告

活動地域の青少年が多数参加して実施

日本マレーシア協会では、株式会社木下グループのご協力を得て、二〇〇七年度年より、サラワク州アペン国立公園において「木下の森」植林プロジェクトを実施し、熱帯雨林再生のため、約三〇〇ヘクタールの地域に六万本の植林を行いました。

昨年度からは、地域の子供達が「木下の森」を定期的に訪れ、森林保全の大切さを学び、植林作業などを体験する青少年研修プログラムと、「木下の森」の保全活動を通じて、環境保全等の社会貢献活動に関心を持つ日本の青年を育成する青年海外研修プログラムを、同社のご協力で実施しています。

今年度の青少年研修プログラムを八月一日（土）に地域の小中学生、大学生など約一五〇名が参加して行い、日本の大学生二名による青年海外研修プログラムを八月七日（必）〜一二日（日）の日程で実施しました。また、本プログラムに合わせて、木下グループ社員の方々五名がサラワク州を訪れ、植林や交流活動に参加しました。

青少年研修プログラム並びに視察団訪問の様子を以下に掲載します。

八月七日（火）

午前、青年海外研修生二名と随行者の森嶋彰広島修道大学名誉教授が成田を出発し、夜にクチンに到着。

八月八日（水）

午前 本協会がクチン湿地国立公園で行っている地域住民参加型湿地林再生活動現場を訪問。サラワク州森林局専門官より、マングローブ林の特性や地域住民が参加して行っている植林活動について説明を受けたほか、育苗と植林活動に参加している地域村落を訪問しました。

午後は、サラワク州森林局にて、「木下の森」をはじめとした様々なプログラムについて説明を受け、意見交換を行いました。夕刻、木下グループ視察団の方々をクチン空港でお出迎えしました。

八月九日（木）

午前、研修生と木下グループ視察団は、サラワク州森林局植林部を訪問し、専門調査官からサラワク州における森林の現状、保全政策、「木下の森」をはじめとする日本の民間

協力プロジェクトの概要について説明を受け、質疑応答を行いました。その後、隣接する森林博物館を見学。

午後は、セメンゴ自然保護区を訪問し、約八〇年前に植林した森の様子や餌付けの時間に出てくるオランウータンの生態を観察しました。

八月一〇日（金）

午前、スリアン地区アペン国立公園に隣接する村落の子供たちが通うクライト小学校を訪問し、児童らとの交流会に参加しました。小学校に到着した際に、児童、教員総出による伝統的な歓迎を受けました。

はじめに交流会が行われ、マレーシア国歌、サラワク州歌、校歌斉唱の後、校長先生の挨拶、木下グループ訪問団代表の挨拶があり、その後幼稚園児の踊りを鑑賞してから、伝統的な先住民族の儀式を体験しました。続いて、小学校高学年の踊りが披露され、記念品贈呈と集合写真を撮り終了。教員との昼食懇談後、「木下の森」へ向け出発しました。

午後は、アペン国立公園内「木下の森」植林プロジェクト活動地にて、二〇〇七年度から地域住民の協力を

得て植林・保育し、森林再生に取り組んできた現場を視察し、メンテナンス作業を村人と一緒に行いました。その後、木下グループ視察団はクチンへ戻り、マングローブ林やポルネオ島固有種のテングザルなどを観察するツアーに参加しました。

研修生は、植林作業に参加している村人が暮らすトン・ニボン村へ移動しました。村長さんに挨拶し、村の周辺を散策してから、村の女性たちと伝統的な編み籠づくりを体験するなど、地域の村の伝統的な暮らしを体験しました。

八月一二日（土）

午前、研修生と木下グループ視察団は、「木下の森」活動地を再び訪れ、植林作業などを体験する青少年研修プログラムに参加しました。当日は、地域村落の子供達に通う

バライ・リンギン中校生の生徒四〇名と教員二名、クライト小学校の児童一〇名と教員二名、トゥリアン小学校（昨年地域に新たに開校した小学校）の児童一〇名と教員二名、マレーシア・サラワク大学生二〇名と教員三名、サラワク州森林局幹部と

スタッフ三名、トン・ニボン村村長と村人二〇名など、総勢一五〇名が参加しました。

はじめに、植林方法の説明を行い、その後、全員で植林作業に参加しました。植林ラインに数名ずつ分かれて、各グループ一五〜二〇本、合計四〇〇本の植林を行いました。

植林作業後、全員で作業小屋へ移動し、学習会を行いました。森林局代表、木下グループ視察団代表、マレーシア・サラワク大学教授が挨拶と講話を行った後、弁当の昼食をとり、最後に、日本人研修生二名と小中高生、大学生の有志が、それぞれ活動に参加した感想などを語り合い、お互いの学びについて共有し、交流を深めました。

夕刻は、クチンにて研修生が木下グループ視察団と夕食を共にし、社員の方々と交流する時間を持ちました。会話を通じて、社会人としての心構えなどを伺う機会となりました。

八月一三日（日）

早朝、クチンを出発し、クアラルンプール経由で、夕刻、成田に到着しました。

「木下の森」 青年海外研修に参加して

日本の大学生を対象とした青年海外研修の実施にあたり、本年五月に首都圏等の大学へ告知し、六月末に二〇件の応募者の中から、選考委員会の審査を経て二名を選出しました。七月一四日(土)午後、都内で事前研修会を実施し、マレーシア事情や環境保全等の社会貢献活動について講義や意見交換を行いました。

その後、八月七日(火)から二二日(日)の日程で、サラワク州に五泊六日し、地域村落ホームステイ、植林作業体験、政府機関や大学訪問等を行い、「木下の森」プロジェクトを通じて社会貢献について学ぶプログラムを実施しました。

研修後、各自が報告書を作成し、提出したほか、一〇月一七日(水)には、都内で開催されたセミナーにおいて、発表を行いました。

二名の研修生による活動報告書を以下に掲載致します。

目黒さとみ

上智大学法学部
地球環境法学科二年

はじめに

私は、上智大学法学部地球環境法学科に所属し、基礎的な法学や世界

の環境関連ルールについて学んでいます。本学科を志したきっかけは、福島で農家をしていた祖父が東日本大震災で被災し、自然災害や原発に興味を持ったことでした。また、英語が好きで大学に入學して国際交流のサークルに入り、留学生との交流を通して海外に対する強い関心を持つようになりました。

昨年は、ASJAインターナショナルが主催するワークショップに参加し、ASEANの国費留学生とASEAN諸国と日本が抱える問題についてディスカッションをしました。私の環境に対する知識も、英語の能力も決して十分とは言えませんが、やったことのないことを体験したい、知らないことを知りたいという情熱と行動力を持って今回の活動に参加させていただきました。

活動の報告

クチン湿地国立公園と周辺地域で行われている住民参加型マングローブ林再生活動地見学

サラワク州の州都クチンから最寄地まで車で約三〇分、スマリアン・バトゥ村の船着場からボートで約五分のところに位置する事業地でマングローブ林を見学しました。周辺でワニが出ると聞き、少し怖くなりましたが、間近でマングローブの力強い根を見て感動しました。この事業は住民参加型の活動であり、苗木を育てる段階から周辺住民の方に携わってもらっています。

実際に何軒かのお宅にお邪魔し、自宅の余ったスペースを使って育てられた五〇本〜一〇〇本ほどのマングローブの苗を拝見しました。マングローブの苗を育てているのは、主に周辺地域の主婦の方であり、主婦業のかたわら積極的に活動に参加されています。最後にマレーシア協会の方が、苗を育ててくれたお母さんに直接お礼のお金を渡していたのが印象的でした。

マングローブは海水と淡水が混ざり合う「汽水域」に生える植物の「総称」であり、近年開発による伐採が問題となっています。クチン湿地国立



村人が育てたマングローブの苗木

公園でも、洪水排水路の影響で侵食劣化地域内の特に劣化の激しい川岸において、マングローブの植林が行っていました。その行程において、苗を育てる段階からメンテナン作業に至るまで地元住民の協力のもとで植林が行われており、持続可能な活動にするための努力を感じ取りました。

サラワク州森林局の訪問 森林博物館見学

サラワク州森林局を訪問し、担当の方からサラワク州の植林の概要についての説明を受けました。具体的には、サラワク州の六五%が森林であり、世界の熱帯雨林の〇・一五%を占めること、生物多様性ホットスポットの一つとして独自の生態系の発達と特異な生物的要素を含むこと、そして森林が地元住民に八万から一



森林博物館を見学

〇万ほどの職業機会を与えていることなどです。

また、博物館ではサラワク州の深林モデルのパノラマや木々の種類を示す標本、伐木後の出荷の過程などの紹介を見学し、森林が昔からサラワクという土地に根付いてきたことを実感しました。以前の私は、生物多様性を維持することは種の存続や周りの生態系を保護するという観点において必要だと考えていましたが、熱帯雨林が医薬品開発に役立っていると知り、ますます種の多様性を重んじる姿勢が大切だと感じました。

セメング自然保護区での オランウータン生態観察

セメング自然保護区では半野生のオランウータンの生態を間近で目にすることができます。訪れた時は私のリサーチが足りず、親とはぐれた



オランウータンの生態観察

り、狩猟を逃れたりしたオランウータンが野生生活の仕方を訓練する場だとは知りませんでした。しかし、かなり自然に近い環境下でオランウータンが生活していると感じました。周りに観光客も多く、オランウータンがロープを伝って移動するたびに人間もまとまってついて行っています。その一挙一動に目を奪われていました。オランウータンは、時折人間のような表情やしぐさをする所が愛らしく感じました。前日にホテルの朝食で相席した英国出身の夫妻も、オランウータンを見るためにサラワクに来たと話してくれました。観光している方は環境意識の高い方、特に欧米出身の方が多かったように思います。

クライト小学校訪問

小学校を訪問し、とても温かい歓迎を受けました。子供達がマレーシア国歌、サラワク州歌、校歌を歌った後に民族舞踊を披露してくれました。この日のためにたくさん準備をしてくださったようで、子供達の父

兄やPTAの方も多数集まっており、とても温かい気持ちになりました。

また、収穫祭の催しがとてもユニークだったと記憶しています。ステーションにお菓子の袋がたくさんぶら下げられた木がセットしてあり、子供達の前でダンスを踊ってから小刀でお菓子の袋を収穫するという内容です。校長先生を皮切りに、我々日本人メンバー全員がやることになりました。子供達からのプレッシャーを感じつつも、私は全くダンスができないので少しだけ踊って、近くの男の子を誘い入れる形でことなきを得ました。オーデイエンスが満足してくれたようなのでホッとしました。

行事をすませた後は、PTAの方が用意してくださった昼食をとりました。また、日本から用意した折り紙をして子供たちと交流しました。

メンテナンソ作業体験

木下の森の隣接地であるランデ保護林でメンテナンソ作業を行いました。具体的には、植林した木の周りの雑草を鎌で取り除きました。ここでも、地元住民に協力していただいていた一緒に作業をしました。住民の方はとても手際が良く、私は短時間作業するだけでも汗が吹き出てしまい、人の手で森林を保全することがいかに大変なことであるか痛感しました。

ホームステイ

トン・ニボン村の村長さんのお宅に一泊させていただきました。はじめに村長さんの家にお邪魔した時は、森林局の方、ドライバーさん、



小学生と折り紙で交流

マレーシア協会の新井さんと酒井さんも一緒でした。村長夫妻が出迎えてくれた後、お茶をしながらマレー語や地域の言葉であるビダユ語で色々とおしゃべりをしていただいたのが印象的でした。

この時、村長夫妻と森林局の方、ドライバーさんは異なる民族グループであったと思いますが、とても打ち解けて話し込んでいたので、会話はわからなかったもののマレーシアの融和で温厚な雰囲気を感じ取りました。(後で教えてもらいましたが、この時は選挙で首相に返り咲いたばかりのマハティール政権について話していたそうです。)お茶が済んだ後は、村の周辺を散歩しました。

トン・ニボン村にはマレーシア協会が協力して基礎を建て、外装や内装を村人が行なった集会所があります。私が見に行った際は拡張する工事をしていました。また、近くにバレーボールコートやサッカーフィールドもあり、とても楽しそうだなと思いました。

村長さんのお宅に戻り、村長さんの息子さんのお嫁さんがカゴ編みを教えてくださいました。カゴの底の部分から少しずつ丁寧に編んでいき、出来上がったときの感動はひとしおでした。と言っても、大事な枠組みの部分はほとんどやってもらい、私は自分ができる部分を一生懸命担当させてもらいました。一緒に泊まったガイドさんが不器用な私をたくさんアシストしてくださりとても捗りました。作業をやっていたらいた間は、村長さんのお孫さんと折り紙をして遊びました。

遊びに来てくれていた三人の孫娘のうち、末娘の子はまだ一歳でみんなのアイドルだったので、かなりデレデレしてしまいました。夕食に呼ばれ、マレーシアで初めての家庭料理をいただきました。それまでに食べたご飯は、どれも日本人の舌に合うものばかりで美味しく食べていましたが、時々脂っこく感じるものがありました。しかし、村長のお宅での夕食は肉や魚の他に野菜のおかずがたくさん円卓に並んでいたため、一品ずつ一通り食べた後、たくさん野菜をいただきました。

私と一緒に泊まった小峰さんが野菜ばかり食べるのを見て、村長さんが少し訝しげだったのを覚えていました。夕食の後、家族と団欒をし、星を見たり、テレビを見たりして過ごしました。とても幸せな空間で、私はこの先一生この日のことを忘れないうらやましいです。



村の女性とカゴ編み体験

木下の森青少年研修プログラム
帰国前にアペン国立公園にて、本プログラムのメインイベントである植林を行いました。アペン国立公園はマレーシア協会の活動により保護区から国立公園に昇格した土地であり、地元住民によってメンテナンソが行われています。植林には、前日に訪問した小学校の児童と教職員、中学生、高校生、そしてサラワク大学(UNIMAS)の大学院生と教授など総勢一〇〇人はいたのではないかと思われるほどの人が集まりました。UNIMASの学生が気さくに我々に話しかけてくれ、また、彼らの中には別のプロジェクトで日本に来たことのある学生もいたので、会話が弾みました。

今回集まったUNIMASの学生は、主にプラントサイエンスという造林学を専攻しており、植林に対する高い知識や意識を持っています。私が「ここで植林することの意義をどう考えている?」と聞くと、「日本の森林は人の手で植林され、維持さ



小中高生と共に植林作業

の成長とともに確認できたらと思います。今回植えた苗は、動物の食料となるようなマンゴーやパパイヤが中心でした。伐採によって住処を追われたオランウータンなどの動物の食料となり、住み着いてもらうためです。私たちの植えた苗が、将来動物たちの憩う場所となることを願って植林しました。

私たちが植林した場所は、すでにその用の穴がほってあり、植える苗もその近くに配置されていました。広大な国立公園の中で、たくさんの人数的ために全てを用意することは大変だったと思います。これも、地元住民の方の協力、そしてその信頼を築いてきたマレーシア協会の皆さんの尽力があつてのことだと感じました。

植林をする前に、植え方のレクチャーを受けました。まず、穴に肥料を少し入れ、土をかぶせて苗木をセットします。その上からさらに土をかぶせて固定し、苗の周りに肥料を撒いて、水をかけて完成です。植林した木がこの先何年も丈夫に育っていけるように一生懸命説明を聞きました。

その後、グループに分かれ、実際に植林をしました。私は高校生たちと同じグループでした。植林する一つの苗を植える場所にグループ一人一人の名前を刻んだネームプレートがあつたのですが、私は作業に夢中になってしまい確認しそびれてしまいました。何年か後に、木

終わりに

私がマレーシアで体験したこと、見たこと、知ったことは一生の思い出になりました。マレーシア協会の現地での精力的な活動、木下グループのご支援、そして事業に協力してくださった現地の方、トン・ニボン村の方などたくさんの方に協力いただき、貴重な機会をいただいたことを感謝しています。私の事後の活動について考える際に、印象に残った話があります。森林博物館を視察した際のことです。マレーシア協会の新井さんが、日本が戦後復興し近年に至る間に、マレーシアの木材が伐採され、日本に多く輸出されたこと教えていただきました。そう聞いて、私はマレーシアに恩返ししたい、また、環境にまつわる活動を精力的に行いたいと考えるようになりました。今回植林したアペン国立公園の森林を見守っていくことはもちろん、残りの大学生活で環境活動に取り組み、環境関連の企業でのインターンなどを行っていこうと思います。



プログラム参加者全員で

最後になりましたが、このような経験をされる機会を与えてくださった木下グループの皆様、日本マレーシア協会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

古峰くるみ

成蹊大学文学部
英米文学科一年

はじめに

私は現在成蹊大学文学部英米文学科一年に属しています。この学科を志望した理由は、将来は観光業など英語を用いた職業に就きたいと思いい、英語の授業に特化しているこの学部を選びました。また、国際交流に興味があり留学の制度が充実しているこの大学を志望しました。現在大学では、まだゼミナールには所属しておらず、基礎的なことを学んでいます。

四月から大学という環境に変わり、新しいことに挑戦したいと考えていたところ、「マレーシア・ボルネオ島青年海外研修プログラム」の募集を知り、自分の新たな一面を見つけることができると感じ、すぐに応募させていただきました。

私は専門的に環境に関して学んでいるわけではありませんが、多文化共生や国際問題に興味があります。日本が同じアジアの発展途上国に対してどのような活動をしているのか、このプログラムを通じて学びたい



事前研修会講師の方々と

思いました。幸いにもその機会を与えていただき、植林地に隣接するトン・ニボン村にホームステイをして、現地の目線から環境について学べるのがとても楽しみでした。そしてこのプログラムを通じて、企業が行うESGと森林保全について知る良い機会になりました。

報告と評価

マングローブ林視察

マレーシア・ボルネオ島サラワク州に着いてから二日目、クチン湿地国立公園とその周辺で行われているマングローブ林再生活動を見学しました。そもそも、「マングローブ」という植物が存在するわけではなく熱帯や亜熱帯の海岸や海水の浸入する河口にはえる常緑低木・高木の一群のことを指します。マングローブの実体は母樹に付いたまま種子が発芽、生育し、落下して潮に流されることなく泥につきささって定着します。マングローブ林の用途・機能は多様で、建築材、燃料材、家畜の飼料、

食用、薬用、染料などに利用されるばかりでなく、漁場やレクリエーションの場を提供し、高潮や強風、海岸侵食から住宅や農地を守る自然の防波堤・護岸としての役割も果たすなど、沿岸地域に住む人々の暮らしと密接に関わっています。

また、マングローブ生態系は、「海の命のゆりかご」と例えられるそうです。海の生物の生息場所、餌場、産卵場を提供するなど、沿岸域の海生生物とも切っても切れない関係にあります。したがって、マングローブ生態系を保全することは、人々の暮らしを守ると同時に、たくさんの生物を保全することにも繋がります。

今回私たちが訪れたマングローブ再生活動が行われている場所には、クチン市内から車船着き場まで移動し、そこからボートで向かいます。初めに、船着き場から出航してすぐ近くで育てているマングローブの苗木を観察しに行きました。私はこの時に初めてマングローブを見ました。近くで見るとマングローブの根は想像よりも大きく、複雑に絡み合っているのに驚きました。苗木の状態はとても良く、手間をかけて育てられているようでした。次にラムサール条約内にある Kuching Wetlands National Park を視察しました。



マングローブ林をボートで巡る

ここはラムサール条約内ですが都市排水により土地が汚染されています。土がむき出しになっています。そこで、日本マレーシア協会が協力して森林保全を行っています。今回私が訪れた時は、育てた苗木を土に植えた状態で、まっすぐと順調に成長していました。最後に、ボートでしか行けない水上村に、育ててもらっている苗木の様子を視察しに行きました。水上の上で生活していると聞き、どのような生活を送っているのか想像が付きませんでした。家の中に入らせてもらい、生活の様子を見ることができました。家は高床式になっていますが、建物が地面と接していないとは感じさせない、しっかりと造りになっていました。

このような生活を送っている彼らに、マングローブ林の苗木を育ててもらっています。種は村人がマングローブ林から拾ってきたものを使用します。苗木を育てているのは基本的に村の女性たちです。苗木を育ててもらおう分、森林保全を行っている団体がお金を支援します。この村で苗木を育てることを初めた当初、女性たちは気乗りのしない様子でしたが、現在は女性たちの小遣い稼ぎになると積極的に取り組んでいました。



森林局で木下グループの方々と

このマングローブ林視察を通じて、村人が積極的に育てているマングローブ林の苗木は森林保全のためだ、という意識が低いのではないかと感じました。もしも森林保全を行う団体が支援をやめても今まで通り環境を守るためにこの活動を続けてくれるのか疑問に思いました。確かに、村の女性が育ててくれた苗木を買い取るため、女性達にもお金を稼ぐ機会ができることはとても良いことです。

今後この活動を持続的に進めていくためには、マングローブ林の役割や環境保全の必要性を老若男女問わず村全体でより理解してもらう必要があると思います。

サラワク州森林局訪問

サラワク州ではマレーシア連邦憲法に基づき、森林部門の法令遵守の検証のため独自の制度を有しています。サラワク計画・資源管理省の下、サラワク森林局 (Forest Department Sarawak) が森林政策や施業規則、伐採権などに関する責任を担っています。

サラワク州の森林政策では「森林に暮らす住民の利益を十分に保護する」ことが最初の項で謳われているのが特徴的です。

サラワク州森林局では木下グループ視察団と共に、マレーシア・ボルネオ島における熱帯雨林の現状と森林保全全面での課題など説明を受け、意見交換をしました。二〇一六年の時点で六五パーセントが森林に覆われ、世界の森林のうち〇・一五パーセントを占めていると聞きました。また八万人が森林に関する職業についていると聞き、マレーシアにとって森林は身近にある生活の一部であることを感じ取りました。

私はサラワク州森林局が日本のNGOと企業の協働による環境保全活動をどのように感じているのか質問してみました。日本マレーシア協会と木下グループは二〇〇七年度よりマレーシア・サラワク州において、

地域に居住する先住民の方々と共に一〇年以上継続的に進んできたためとても信頼があつく、地域住民からも信頼されている。また村の子どもも参加して植林を行うため将来への影響が大きい、と答えてくれました。私はそれを聞き、日本マレーシア協会と木下グループがサラワク州と長い時間をかけて築き上げた信頼関係の強さを実感しました。

トン・ニボン村でホームステイ私が今回の研修で一番楽しみにしていたのは、四日目に行われるサラワク州スリアン地域、インドネシア

の国境付近の山奥にあるトン・ニボン村でホームステイをすることです。トン・ニボン村はクチン市内から車で二時間以上移動したところにあります。車での移動中は少しでも会話や感情を伝えられることができればと思い、マレー語を覚えることで必死でした。村に着き村長さんの自宅に何うと、温かく迎え入れてくれ、快く泊めさせてくれました。

この村は自給自足を行っており沢山の放し飼いにされた鶏が歩き回っていました。この村はコショウやアブラヤシの栽培で生計を立てています。村で収穫したコショウを天日干ししている様子を村のいたるところで見ることができました。アブラヤシから取れる油をパーム油と言い、世界最大の生産地がここマレーシアです。

パーム油は、年間を通じて大量に収穫できて単価が安いだけでなく、コレステロールが低くて健康によく、食品の風味を変えないなどから、食用需要を中心に世界的に生産量が増



カゴづくりで村の女性と交流



木下の森でメンテナンス作業体験

えています。パーム油の需要が世界的に増加すると、アブラヤシプランテーションが急速に拡大します。拡大すると同時に森林は減少し、深刻な被害をもたらします。

洪水の被害や水質が悪化するだけでなく、野生動物が移動して生きていくために必要な川沿いの森が失われ、動物への影響が大きな問題となっています。ホームステイをして、地域村落の現状と森林保護の実態を自分の目で見て感じることで大きな変有意義な時間を過ごせました。

また、トン・ニボン村では植林で使用する苗木を育ててもらっています。私はこのプロジェクトをはじめた頃の村人の反応が気になり、この村に当初から関わっている方々に伺ってみました。植林地から一番近いトン・ニボン村に協力してもらおうと決めたとき、村に向かう交通整備ができていなかったため、一日がかりで村に出向き交渉していたと聞きました。

村人達は自分達の土地を奪われる

のでないかなど警戒し受け入れてくれませんでした。村に何度も訪ね木を植えることの必要性や環境保全についての説明を続け、次第に活動を理解してくれるようになりました。私がこの村にホームステイができるような信頼関係になるまでには、関係者の根強い努力があったことを深く感じました。そのおかげで、今では植林作業で使う苗木を積極的に育ててくれています。このように村人全員が森林保全について納得するまで説明し、友好関係を保ち続けることが地域参加型の植林を成功させるうえで大切であると改めて実感しました。

アペン国立公園での活動

最終日である五日目、アペン国立公園にて「木下の森 青少年研修プログラム」に木下グループ視察団とともに参加しました。近隣の小学校や中学校、高校、国立マレーシア・サラワク大学（UNIMAS）から沢山の生徒が参加し、今回携わった人数は約二〇〇人近くいました。いくつか覚えたマレー語で挨拶をすると子ども達が元氣よく笑顔で返してくれたことが印象に残っています。

私は植林作業が初めてだったため説明の通りできるか不安でしたが、UNIMASの学生が手伝ってくれたためスムーズに行うことが出来ました。子ども達も積極的に植林作業に取り組んでいました。作業後には活動に参加した皆で昼食をともにし、UNIMASの学生や関係者の

方々がこの「木下の森」に対する熱い気持ちを語ってくれました。子ども達も今日の活動を通して学んだことが沢山あったと思います。

前日にメンテナンス作業を行った地域は自然林に近くなっています。今回私たちが植林した地域もいつか自然林のように成長しているか絶対に見に行きたいです。木を切ることは簡単ですが再生して元の形に戻すにはこんなにも時間がかかり大変な作業であることを改めて実感しました。

講義や説明を受けているだけでは得られない、日本マレーシア協会や木下グループ、サラワク州森林局の森林保全に対する熱い想いを心から感じ、私もその一員として参加できたことを誇りに思います。

「木下の森」プロジェクトに参加してみて、私たちがただ苗木を植林するだけではなく、地域に居住する住民に木を植えることの大切さ、環境保全とはなにかを理解してもらい、



UNIMAS学生と植林作業

自分たちで持続的に活動できる知識や作業方法を伝えていくことが大切だと思いました。

また、「木下の森」は地域参加型の植林として様々な地域の学校から来る先生や生徒、村人同士の交流そして大学院などで植林について専門的に研究している教授や生徒と、地域の人々が交流する機会を作る素晴らしい活動だと思いました。

今後の活動

私は今回のマレーシアの研修を通して、環境に対する考え方が大きく変わりました。自然環境を保全しようと思った時、忘れてはいけないこととしてWWFのホームページにこんな言葉がありました。

『国境のような人間が引いた線とは関係なく、あらゆる自然が存在している。つまり、森林や海などの自然を保全しようとするならば、基本的に、その地域の自然環境の広がりや、生きものたちのつながりを、一つのまとまりとして考え、守ってゆかねばならない、ということ。時には、いくつもの国の国境を越えて、その保全に取り組まねばならないケースも、数多くあります。』

パーム油や森林伐採はマレーシアだけの問題ではなく、私たちが商品の一部として消費していることを忘れてはいけないのです。専門的に環境を学んでいない人でも、環境問題について考え実行する機会は沢山あります。エコバックを利用するなど



作業後に子供達と交流

今すぐにも生活を見直すことは可能です。今回の研修で自然保護の現状を体験したからこそ、一人一人が自分の行動を見直すことが環境を守るためにまず私たちにできることなのだと思えます。

これからの私の長期課題として、環境を専門的に学んでいない人も実際に現地に訪ね、現状を知る機会を増やしていきたいです。また、様々な分野のボランティアに挑戦し、国境関係なく社会貢献できる大人になりたいです。

最後になりましたが、私がこの研修で貴重な体験をし、将来の目標を見つけることができたのは、木下グループの皆さま、日本マレーシア協会の皆さまのご支援、ご協力のおかげです。本当にありがとうございます。

◆ 二名の研修生は10月17日(水)夕刻、都内で開催した本協会「創立六〇年記念セミナー」において、活動報告の発表を行いました。 ■